

## 随 筆

## 杭州に老朋友駱涵秀を訪ねる\*

佐藤 三禄\*\*

\*平成 19 年 6 月 10 日原稿受付

\*\*〒227-0044 横浜市青葉区もえぎ野 10-47

## 10 年ぶりの杭州

今年 4 月末から半月余り上海で過ごした。その間 5 月のゴールデンウィーク（中国では 5 月 1 日から 7 日までが黄金周で連休）の最中、妻を伴って 10 年ぶりに杭州に老朋友（ラオボンヨウ）駱涵秀（ルオハンシュウ）女史元浙江大学教授を訪ねた。

中国、杭州は何遍か訪れたが、それでももう一度行って見たいといつも思っている都市である。杭州の美しさは絶世の美人西施の名とともに知られる西湖と、その周りの山々との調和の取れた景色にある。その背景には宋時代ここに都が置かれ、この間、戦さを排して文芸の興隆に力を注いだ文化の薫り高い雰囲気が連綿と続いている土地柄がある。“上有天堂，下有蘇杭”（天に楽園有り，地に蘇州杭州あり）と詠われるのもいかにも思われる。

市街地の発展に伴い一時西湖の水の汚染がいわれていたが、元武蔵工大客員研究員の浙江大学李世倫先生の話では、現在は钱塘江に水路を通じ水の入れ替えをしているそうで、昔の綺麗さを保っている。さすが黄金周とあって湖の回りの道路は自家用車で大渋滞しているが、黄金周の期間は偶数日と奇数日に分けて、走れる自動車ナンバーも偶数番と奇数番としているようだ。自家用車で迎えに来てくれた浙江大学機電控制研究所所長王慶豊教授は、「私の車は今日は走ることができますが、明日は走ることができません」と話していた。

## 第 1 回流体伝動与控制国際会議 1985 杭州

私にとって杭州は大きな意味のある場所である。1985 年 9 月に浙江大学主催第 1 回流体伝動与控制国際会議が開催され私も参加した。この時が私の中国行き最初であり、国際会議に参加した最初でもあった。以来中国に多くの友人を得、今日まで 20 数回も中国に出向くこととなった最初である。会議の責任者である流体伝動与控制研究所長路甬祥教授はドイツ・アーヘン留学から帰国したばかりであったが、開会式でのアーヘン工科大学バッケ教授のスピーチを今でも覚えている。「彼はアーヘンを去るときに“帰国後 3 年以内にアーヘンの研究所と同じ研究所を作り、アーヘンのコロキウムと同じ国際会議を開きます”と語っていた。まさかと思ったが、今日それが本当のことだとわかりました」というスピーチであった。路教授はその後中国科学院院長となり、政治家としても全国人民代表会議常務委員会副委員長を務めている。現在も流体伝動与控制研究所代表として浙江大学の象徴となっている。

当時の学長韓禎祥先生が武蔵工大を訪問された時、大学間交流の話を担当したことから、華僑飯店で開かれた晩餐会では、日本からの偉い先生方を差し置いてメインテーブルに招かれ大変恐縮した。

## 駱涵秀女史との出会い

当時私は振動試験機の油圧制御の研究をしていたところで、会議の期間、振動試験機の実験室を見学した。大型のおなじみの形の油圧サーボが動いている。傍らで機械の操作をしているのは相当な年齢（失礼）の女性である。実験室の技官かなと思っていた。会議が始まって油圧制御の会場で隣に座ったのが件の女性である。彼女が当時副教授の駱涵秀女史であった。まったく思いがけないことであった。当時日本では工学部に女性教授が居るか居ないかという頃である。中国政府派遣第 1 期進修留学生として武蔵工大に来ていた長春試験機廠の金泰甬高級エンジニアから、中国における材料試験機の油圧サーボ制御では、浙江大学に駱先生

が居られると聞いていたが、詳しいことはまったく知らなかった。ましてや女性の先生とは思ってもよらなかった。お近づきの印に当時流行り出したフレネルレンズの薄型虫眼鏡を差し上げた。「お互い歳だからこれが便利ですよ」と失礼なことをいった記憶がある。これが交流の始まりである。今回訪問した時、あの時のことを覚えているか聞いたが、彼女も覚えていた。私の知る範囲では油圧制御分野において中国はもとより世界最初の女性研究者である。文革の時代を生き抜いて来た経歴や、男女同権の中国とはいえ家庭を支えつつも研究では新しい分野を開拓した成果を考えると、実に敬服すべき人物である。

1987年、駱涵秀女史は中国儀器儀表学会試験機学会代表団(団長中国長春試験機研究所王建輝所長)の一員として、日本材料試験技術協会の招きで来日した。ある日の夕方、後樂園遊園地に東京精密測器(株)が製造した6軸モーションベース遊戯装置UFOに案内したことがある。後に浙江大学は国家プロジェクトとして6軸モーションベースの研究開発を担当したが、駱女史がこれを主導した。UFOがその切っ掛けになったのかもしれない。中国における油圧サーボ技術黎明期以来、学界および産業界で油圧サーボの研究開発を主導した第一人者である。1986年頃、香港の財閥が寧波市に寧波大学を寄贈した時、機械工学科主任としてその立ち上げを担当し教育行政においても功績を挙げた。

1990年に武蔵工大客員教授として滞日中、JFPSの秋季講演会が徳島で開かれ特別講演をしてもらった。懇親会での阿波踊りコンテストでは女史は特別賞に輝いた。その折多度津工学試験所の原子炉大型振動試験装置による試験現場を見学し大変喜んでおられた。当時心臓を患っておられ、来日も危ぶまれたが、無事帰国され安心したことを覚えている。1996年のJFPS国際シンポジウム横浜にも参加され、横浜港クルーズが楽しかったことを話しておられた。

1989年私は浙江大学で講義の後、駱女史と当時北京第二外語大学学生だった三女呉衛さんの案内で北京に遊び、香山のハイキングに連れて行ってもらった。その直後北京天安門事件が起き呉衛さんの安否が気遣われたが、地方の友人宅に逃れていて無事だったという知らせが届いた。なかなか活発でお茶目な末っ子で、私の英文手紙に赤字で添削をして戻してくれる、なんとも可愛いお嬢さんであった。今も時々ミネソタから便りがある。駱女史を訪ねるといつも呉衛さんの話である。

### 若い人たちとの交流

浙江大学での会議の前の週、私は中国東北地区の長春、沈陽、ハルビン、鞍山を訪ねていた。ハルビンから杭州までどうしても鉄道で行きたいという私のわがままな申し出に、世話をしてくれた長春試験機廠の金泰甬高級エンジニアは音を上げて、「先生の好きな様にしてください」と突き放された。その事情を聞いたハルビン工業大学の許耀銘先生が、「日本人が一人でハルビンから杭州まで鉄道で行くなんて無理なことだ。大学院生の王祖温君を同道させましょう」と配慮してくださった。上海まで直通30数時間の列車の旅では王さんから中国語の基礎を教わった。これが私の現在の中国語学習の起源である。たまたま上海駅の都合とかで手前の真如駅で列車はストップ、あとはバスなりタクシーなりで行きなさいということになり、本当に王さんが居なかったらどんなことになっていたことやら。王さんはその後日本に留学し、今や大連海事大学学長である。会議中は大学院生曹東輝君と猪健君が私の世話をしてくれたが、自分達の学生寮の生活や、丁度新学期開始時期で、新入生の軍事訓練の様子なども見せてくれた。二人ともその後日本に留学し、現在曹さんは日立建機(中国合肥)で、猪さんは浙江大学で大活躍をしている。当時研究所の若手だった楊華勇さんが今は中心メンバーとして活躍している。当時の若い人たちと交流を持つことができたことが、その後の私の活動に大いに役立ったことは間違いない。

### 「100年掛ければ何とか日本に追い付けるでしょう」

会議の合間のある日、一人の若い先生と校内を歩きながら話をしていた。当時の中国社会はあらゆる面でまだまだ整備されておらず、一方日本は高度成長の真っ只中、格段の差が感じられた。中国の若い先生も同じように感じていたのだろう。その彼が「現在の中国は日本と比べてまだまだです。でもあと100年もすれば何とか日本に追い付けるでしょう」と自信を持って語っていた。決して現状に諦めての話ではなく、自分達は希望を持って必ず実現できるという様子であった。それを聞いたとき私はびっくりした。その時私の頭の中には100年という時間スパンはなかった。せいぜい考えられて10年とか20年先位というところで、50

年先とか 100 年先という時間を具体的に考えるなど想像もつかないことであった。しかしその後の中国社会の変化を見ると、確かに 50 年、100 年後を目指して進んでいるように思われる。この時間スパンの違いは国民性によるのであろうか、あるいは彼らが持つ歴史の長さからくるものであろうか。彼らがやって来たことを振り返ると、教育こそ国力の基としているように思う。まずは精鋭を海外で教育し、その人材をもって教育の拡大再生産を計り、15 億ともいわれる国民の知識活力を社会の発展に結び付けようとしている。50 年、100 年を考えなければ出来ないことである。しばらくぶりに見る大上海の驚くべき発展も、100 年構想の序章に過ぎないように思われる。

### 浙江大学図書館苦難の歴史

1997 年浙江大学創立 100 周年記念式典に武蔵工大学長代理で出席した。中国全土の卒業生に案内を出したとのことで、小雨の中早朝から何万人もの卒業生が校庭に集合し、式典では時の副総理李嵐清氏が祝辞を述べた。終日、キャンパスで催し物があり夜は体育館で学生、教職員によるオーケストラと演劇が行われた。演劇の演題は浙江大学図書館の苦難の歴史であった。第 2 次大戦中日本軍は杭州湾上陸作戦を敢行した。当時の大学人は貴重な文化資産である図書を何としても守らなければと考え、図書の避難を決断した。大学の教員も学生も本を担いで徒歩千キロの道のりを逃れた。その苦難の行程を学生教職員が演じるのである。実に感動的な場面であった。駱涵秀教授も合唱団の一員として出演した。路甬祥浙江大学学長が武蔵工大での講演で、「中国と日本は不幸な戦争をしたが、これからは戦争ではなく、科学技術で両国が競争することこそ未来を拓くものである」と語っておられた。図書館の苦難の過去を乗り越えて日中両国の友好発展に尽くしてきた浙江大学の大学人の見識に敬意を表したい。

### 浙江大学新キャンパス

王慶豊所長の車で浙江大学の研究所に立ち寄り、傅新教授両先生の案内で見学した。久しぶりの大学キャンパスは青桐の葉に覆われいかにも大学らしい落ち着いた雰囲気懐かしい。近年、杭州市内のいくつかの大学が統合して新たに浙江大学となり、市西北部の新開地に広大な新キャンパスが建設中である。5 年後に完成するそうだが、すでに一部は使い始めている。一面芝生に覆われ近代的な様相を呈する大キャンパスにびっくりしたが、見る所木がまったくない。これでは夏の暑い時期、木陰で読書や談恋愛（タンレンアイ）したい学生さんは困るだろうなどといらぬ心配をした。中国各都市で市外に教学地区を新設する動きが進んでいるようであるが、浙江大学でも新キャンパスの資金の 3 分の 1 は政府から、3 分の 1 は大学が、3 分の 1 は銀行から調達しているそうで、銀行に返済しなければならないので大変ですとのことである。このあたりは日本の国立大学よりずっと進んでいる。中国産業界の発展に伴い大学と企業の協力も重要になってきているようである。この辺りに日本の学会や大学が中国の大学と相互に協力できる所があるのではないか。

### 駱涵秀画伯

駱涵秀女史は大学を退職後、大学内の成人教室で絵画を習っているという話は聞いていた。4 年程前、那覇市で開かれた JFPS 秋季講演会に王慶豊教授が特別講演をされたとき、駱涵秀女史から梅花の画一幅を預かってきて戴いたことがある。なかなかの腕前に感心した。最近移り住んだ自宅は杭州市の北部、文一西路にある 7 階建てマンションの 3 階、130 平米の瀟洒な部屋は京杭運河に通じる美しい小クリークに面し書斎は今や駱涵秀画伯のアトリエ、卓上には画紙や絵の具や筆が、壁には作品が掛かっている。絵画と書法を習っているとのことで、私のために書かれた書を一幅戴いた。絵や書を書く時は立ったままで腕を張って書くそうで体力的にも大変らしい。工学にも芸術にも長け正に現代の女レオナルド・ダ・ヴィンチといえよう。ご主人呉錦波教授は 2 年前に亡くなられたが、大きな寝室の壁には花嫁さんのおめかしをした駱女史と呉先生お二人の金婚記念写真が飾ってあり、温かな呉先生との静かな生活が偲ばれた。以前ご夫妻の同級会のピクニックに同行させて頂いたことがある。杭州から 3 時間ほどの富春江の舟遊びで、船の上で魚を料理して食べたり岸の寺廟に上がって見物したり、ご夫妻や呉衛さん達と楽しんだ山水画のような一日を想い出す。今回も夕日の美しい西湖で駱女史ご一家と三譚印月巡りの舟遊びの後、古い詩に「山外青山楼外楼・・・」と詠まれた湖畔の餐厅楼外楼でご馳走になった杭州料理は、洗練された美しさと上品な味で正に天下一品であった。

二人とも職を退き気楽な身分での再会は、美しい西湖の景色を介して私の日中交流始動時を思い起こさせてくれた。宿舎杭州暇日酒店（ジャーリージョウディエン）の日式餐厅 ROBATA 焼での返礼晚餐では、駱先生、王先生、李先生、傅先生らと、私の怪しげな中国語で武則天や西太后の女性論から、現代家庭での男性苦力論などで盛り上がった。退職後本格的に始めた私の中国語の学習はこれからいよいよ佳境に入る。今回王先生にお願いして古代中国科学技術の歴史書を送ってもらった。中国語の勉強を兼ねて読み始めている。中国の人や文化のより深い理解を楽しみに続けているが、この次杭州に行くときには、正しい中国語で人生を語りたいものである。

緑陰特集号の読み物として尊敬する老朋友駱涵秀女史の思い出話をさせて頂いた。

### 筆者紹介



きとうさんろく  
佐藤三禄君

1964年東京工業大学大学院博士課程修了

1973年～2004年武蔵工業大学工学部機械システム工学科教授

武蔵工業大学名誉教授

専門分野 油圧制御

日本フルードパワーシステム学会，日本機械学会会員

工学博士

E-mail:sansato@tc4.so-net.ne.jp



写真1 画室の駱涵秀女史 2007年5月



写真2 西湖三潭印月風景 2007年5月



写真3 1985杭州第1回流体伝動与控制国際会議招待状





写真4 1990年JFPS徳島 阿波踊り入賞者



写真5 1996年JFPS国際シンポジウム横浜 駱涵秀女史（中央）と招待若手研究者  
王慶豊先生（左2人目）

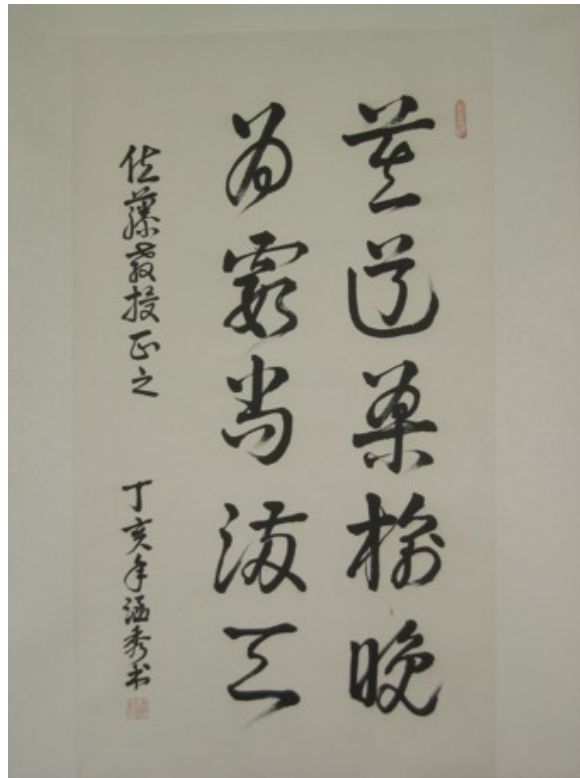


写真6 駱涵秀女史作品



写真7 駱涵秀女史作品